

方方「民的 1911」に見る辛亥革命

瀬 邊 啓 子

1. はじめに

2011年は辛亥革命から100年の記念の年にあたり、中国では映画『1911』（ジャッキー・チェン総監督・主演、張黎監督、2011）など文藝作品が発表されたことを始め、辛亥革命を記念すべくさまざまな催しが行われた。

そのなかの一作とも言えるのが、方方「民的 1911」（『上海文学』2011年第7期）である。方方が脚本を担当した映画『民的 1911』（魯藝監督、2011）が、2011年9月28日に武漢で初公開されていることから、「民的 1911」は辛亥革命（武昌蜂起）を記念する映画作品のために書き下ろされたことが窺える。

辛亥革命の契機となったとも言える武昌蜂起は、1911年10月10日に湖北省武漢市の武昌（当時は武昌城）で起こった。武漢在住の作家方方は新写実小説や“漢味”小説でも知られている作家であり、『武漢人』（浙江人民出版社、1997）を始め、武漢や生活者の姿を積極的に描いている。それだけではなく、『漢口的滄桑往事』（湖北人民出版社、2004）では中華民国期の漢口を描き、『漢口租界』（湖北長江出版集団、湖北美術出版社、2006）でも漢口の租界の建築物や歴史を紹介している。さらには『漢口租界』などを書くにあたって収集した資料をもとに、武昌戦役を題材に「武昌城」（『鍾山』2006年第6期、『人民文学』2011年第3期、単行本は2011年人民文学出版社より刊行）を描いた。このように、方方は近年たんに武漢という都市を描くだけではなく、歴史的背景を描くことをしている。

その方方が 2011 年に武昌蜂起および辛亥革命をテーマに作品を描いたことは、なんら不思議なことではなく、むしろ当然の流れとも言えるだろう。本稿では、方方「民的 1911」を通して描かれた辛亥革命がどのような革命であったのか、それと同時に、方方が描いた「民」の意味について分析してゆきたい。

2. 小説「民的 1911」

「民的 1911」は武昌蜂起の前夜を描いた作品で、主人公——小説のなかでは“我〔ぼく〕”の視点および革命家たちの様子の 2 つの視点から武昌蜂起を捉えている。民の父親は大道床屋を生業としていたため、市井の情報を耳にすることができた。「革命」のことを民に教えてくれたのも清朝嫌いの父であった。しかし当の父親は泣き虫で、何かあると大泣きし、肝の据わっていない人物であった。

一方、革命家たちは孫文が東京で中国同盟会を作って以降、南方で何度も蜂起するが失敗に終わっているという状況にあった。民は世界がどんな状況にあるのかも分からないままに、“童年時代〔幼年期〕”を謳歌していたのだが、花園山に遊びに行っては、花園山に集う留学帰りの人々が何事かを議論している様子をうかがっていた。

そして 1911 年がやってくる。小説には 1911 年の秋が始まり、9 月 14 日以降の革命派の人々の動向および清朝側の動き、そして民たち武昌城内に暮らす庶民たちの様子が克明に描かれている。そのなかでも、特に武昌蜂起の起こる前後 10 月 9 日から 11 日までの様子は詳細に描かれており、革命派の人々や民たちがどのように蜂起を成功に導いたのかを描いている。

主人公は蜂起を察知するや、伝令などを手伝うことで、子供ながらも革命軍に参加することになる。民の父親も民に引きずら

れるようにして革命軍に参加し、泣き虫な父親なりに手伝っていた。民はそのなかで死を目のあたりにするも、「革命」を遂行し、そして勝利の瞬間を迎えるのである。

そしてエピローグとして、開国の式典を描き、中国の大地が人民の国になったことを示すとともに、中国の未来は人民が築いていくということを高らかに謳っている。

3. 「民的 1911」に描く武昌蜂起と「民」

「民的 1911」に描かれた武昌蜂起の過程を目にすると、蜂起そのものがスムーズにいったわけではなく、様々な事故や事件から決起日が二転三転し、右往左往しつつも蜂起が行われることになった様が窺える。このようにスムーズに事が運ばなかったために、「民的 1911」に描かれた武昌蜂起は少しコミカルな要素をはらみつつも、「ドラマ」的要素の濃い物語として描かれている。

武昌蜂起の起こる前後の10月9日から11日までの描写は革命派の人々を中心に描いているため、主人公たちがなおざりにされている感は否めない。しかし武昌蜂起がさまざまな障碍があるなかで偶発的に起こさざるを得なかった過程というのは面白く描かれており、革命の主人公ではない民たちがなおざりにされてしまうのも致しかたがないと言える。

方方は「民的 1911」のなかで、呉兆麟が革命軍臨時指揮官として十の指示を出す場面において、『辛亥武昌首義史』（賀覚非・馮天瑜、武漢大学出版社、2006、p.181⁽¹⁾）から十の指示の内容を引用している。小説の武昌蜂起にいたるまでの描写においても、花園山における集会から触れるなど、『辛亥武昌首義史』との共通点が多く見られ、「民的 1911」は『辛亥武昌首義史』を下地に描かれていると考えられる。

例えば、1911年10月9日午後に起こった宝善里の爆弾の爆発

事故に関して、『辛亥武昌首義史』では以下のように書かれている。

孫武は窓際に座って、洗面器で爆薬を検査しており、丁立中、李作棟は室内の小さな丸テーブルにて紙幣の印章を捺印していた。王伯雨は書類を整理しており、鄧玉麟は時計を買いに出かけており戻ってはいなかった。劉公の実弟劉同はちょうどこのとき機関部へ来ていて、孫武のそばで爆薬の検査を見ており、さらに軍隊の同志二名が雑用を行っていた。劉同は全く気にもかけずに、吸っていた煙草の灰を爆薬の上に落としたので、一声大声でどなりつけられた。爆発が起こらなかったけれども、爆薬から煙が出た。孫武は顔面と右手を負傷し、飛び散った爆薬が、王伯雨の右目にやけどを負わせた。李作棟は慌てて立ち上がり部屋の隅のハンガーから上着を取って孫武の頭を覆い、丁立中および軍隊の同志二名と（孫武を）支えて裏門からフランス租界の同仁医院に連れて行き医者にかからせた。その他のその場にいた者は書類、名簿を持って出ようとしたが、いかなせん鍵がなく、戸棚の鍵を開くことができなかった。(2)

方方が描く同場面はかなりの長さになるため、上記との共通点と差異を上げることに止める。共通点は以下の点である。

- 1) 李作棟は部屋の中央にある丸テーブルで印刷されたばかりの紙幣に印章を捺印している。
- 2) 孫武が窓際に座って、洗面器のなかの火薬を検査している。
- 3) 鄧玉麟が蜂起のために時計を買いに出かけ、事故のときには不在にしていた。
- 4) 劉同がやってきて、孫武のところに来て、煙草を吸って、灰を気にもせず落としていた。

- 5) 爆薬の事故は爆発ではなく、煙があがるに止まる。
- 6) 李作棟が部屋の隅から上着を取って、孫武の頭を覆う。
- 7) 李作棟と二名の人員が孫武を病院へ連れて行く。(同仁医院であることは後で述べられる)
- 8) 鍵がなくて、書類や名簿が持ち出せない。

しかし差異も見られ、差異は以下のようになっている。

- 1) 李作棟が印章を押している作業をともにしていたのが、劉炳である。
- 2) 火薬が爆発したのは、孫武が爆弾をテーブルに落としたことによる。
- 3) 王伯雨および丁立中はその場にはいない。

このように異同はあるものの、その共通点は多い。またその後、鄧玉麟が戻り事態を知り、同仁医院に孫武を訪ね、即時行動を起こすよう促されるという記述も同じである。さらに『辛亥武昌首義史』には李伯貞『共進会從成立到武昌起義前夕的活動』(湖北人民出版社、1979)を引用し、劉燮卿(劉炳)が宝善里で逃げ遅れてつかまったことに触れられているが、「民的 1911」でも同様に劉炳が逃げ遅れて、逮捕されている。

方方は登場人物を絞るために、王伯雨と丁立中を意図的に外し、逃げ遅れて逮捕されてしまった劉炳を代わりに李作棟の作業に加えた。また宝善里の事故も煙草の灰では事故が起こらずに、その後孫武が手を滑らせてしまうという流れにしても、一旦安心させた上で事故が起こるという展開にして、小説としての面白味を増している。このように、方方は作品の面白みを計算した上で、史実に外れない程度の改編を行ったのであろう。

方方は「民的 1911」の主な登場人物の職業でも、武昌蜂起を

描写するうえで巧妙な配置をしている。民の父親は大道床屋で、左隣の住民は趙裁縫と呼ばれる裁縫屋である。そして民の仲よしの友呉四貴の父親呉麻子は漬け物屋を営んでいるものの、花園山に出入りするインテリたちの一人呉禄貞と同村出身者であり、民たちに近代教育への興味をかき立てるきっかけをつくる。

民の父は街頭で床屋を営むため、そこで革命家たちと知り合って情報を得ることになる。つまり父親は政局の変化を民に伝え、そして「革命」のことを教える役目を負っている。さらには「床屋」という職業が武昌蜂起の成功後、大きな意味を持つことになるのだ。それは一つには辮髪を剪り落とすことは人々が清朝の束縛から逃れることを意味し、辮髪を剪り落とすことのできる床屋は市井のなかの変革の最前線に立て得る職業であった。さらにはラストシーンにつながる重要な役目がある。それは黎元洪の辮髪を剪り落とすことである。

「当初、都督就任を拒んだ黎も、十六日には自ら辮髪を剪り落とした」（川島真『近代国家への模索 1894-1925』岩波新書、2010、p.133）とされるが、小説のなかでは10月12日に民の父親が呼び出され、彼が黎元洪の辮髪を落とす役目を負ったと描かれている。これは最初都督就任を拒んでいた黎元洪の態度が和らぎ、辮髪を剪り落とすことに同意したのが、10月12日とされること（呉劍傑『武昌首義——辛亥革命在湖北』湖北長江出版集団・湖北人民出版社、2011、p.95 参照）に由来するのだろう。

『辛亥武昌首義史』にも、「10月12日、蔣翊武、蔡濟民は黎元洪に辮髪を剪り落とすよう言うと、黎は何度もじっくり考えてようやく承諾し、ついに丁仁杰（1881～1920）、劉度成の二人が彼のために辮髪を剪り落とした」（p.219）と述べられており、方方の小説と内容を一にする。もっとも黎元洪の辮髪を剪り落としたのは名もない庶民の一人の父親ではないが、方方はその役目を

泣き虫で、気の弱い、まさに小市民と呼ぶべき父親に託したのである。

さらに民の父親は気が小さいということもあるが、道化役者のように場を和ませる存在としても描かれている。例えば、上述の黎元洪の前に立つや、「ぼくの父親は高官を自ら目にすることができて、喜んでしまい、前に進み出て黎元洪に叩頭し、『黎都督に叩頭』と口にした」(p.37)。そして自分が黎元洪の辮髪を切り落とす大役が与えられたと知ると、「ぼくの父親は喜んで『おお！ここ二日で、もう何人の頭を切り落としたか分かります』と言った。ぼくは父親が緊張して、言い間違えたことが分かっていたので、わざと脅して言った。『父さんは今は肝が大きくなったんだね、恐れもせずに頭を切り落としたって？』ぼくの父親は驚いてしまい、両膝からは力が抜け、また地面に跪くと、『いやいやいや、辮髪を切り落としたのです、辮髪を切り落としたのです』と口にした。蔣翊武はもう一度父を引き止めて、『また跪いたら、お前さんの頭を切り落とさねばならなくなるぞ』と言った」(p.37)。そうしてその場にいた全員が笑いに包まれるのである。黎元洪もつられて笑ってしまい、その雰囲気のままに民の父親は黎元洪の辮髪を切り落とすのである。

父親は教養のない庶民の代表と言えるが、彼の発言は周囲を笑わせる。見ようによっては、父親の無知を笑っているとも言えるのだが、方方「民的 1911」では無知を笑うというわけではなく、緊張の緩和というスパイスとして用いられている。革命の戦いのなか、人々は緊張にさらされている。しかし緊張の場面で、民の父親が周囲を和ませる発言をする場面が挿入されることで、方方は作中の緊張と緩和をうまく使い分けているのである。

次に趙裁縫であるが、彼は劉公が持っていた「鉄血十八星旗」のデザイン図をもとに 20 枚の旗を作るよう密かに依頼を受ける。

この旗は共進会の会旗とも言えるものだが、武昌蜂起成功後に掲げるために準備されたものであった。

さて小説のなかでは、趙裁縫がこの旗の製作を依頼されたことで、2つの役割を果たすことになる。10月3日に旗を受け取りに趙師梅たちが来たときに、夜しか作業ができないからと言い訳をしつつ、趙裁縫は依頼された20枚のうち18枚のみ旗を渡し、2日後に残りを取りに来てくれるよう話した。そして10月9日に漢口宝善里で孫武が誤って爆弾を爆発させる事故が起こる。宝善里はロシア租界であったため、革命党が利用していたのだが、この事故が発端となって、ロシア人警察官に踏み込まれてしまう。そのため革命参加者の名簿や書類の多くが宝善里に残され、鉄血十八星旗18枚もまた宝善里に置きざりにされてしまった。

革命が成功するや、掲げるべき旗がないことに気づいた呉兆麟は鄧玉麟に旗のことを尋ねる。そこで鄧は旗が18枚しかなかったことを思い出し、趙師梅に残りの2枚について尋ねるのである。そこで趙裁縫のところにまだ残りの2枚があることが判明し、「長江に面した漢陽門と高くそびえた蛇山の上に建つ警鐘楼でそれぞれ鉄血十八旗が掲揚され、ここに長年掲げられていた清龍旗〔清の国旗〕は引きはがされてどこへ行ったのかも分からなかった。薄明るい触光のなか、その新しい旗印は風になびいてはたはたと揺れ動いており、その誉れは長江全体を明るくしていた」（『上海文学』2011年第7期、p.31、〔 〕内引用者）のだ。そして趙裁縫はさらに旗を作るよう依頼を受ける。

次に趙裁縫は人々に鉄血十八旗の意味を喧伝する役目を負う。清龍旗が嫌いだった人々も、新たに出現した奇妙な旗をいぶかしんでいた。呉麻子もその一人で、しかも趙裁縫がこの旗を作ったことを信じない。そこで趙裁縫は「革命党がわたしに話したのさ。この赤色はな、血を表し、黒の角はな、鉄を表しているんだ。こ

れこそが鉄血「強い意志と犠牲の精神」という意味なんだ。どうして星が18個かって？これは18の行政区で蜂起があったことを示しているんだ。星がどうして黄色なのかって？これが表しているのは炎帝・黄帝の子孫「漢民族」ってことさ」(p.34、〔 〕内引用者)、と旗の意味を解説する。

このように趙裁縫は鉄血十八旗を製作し、革命軍がその旗を掲げることができるように所持するという役割と、人々に旗の意味を解説するという2つの役割を果たす。そのために裁縫を生業としていたとも言える。また旗の製作を依頼されたことで、民たちに革命を匂わせる発言もしており、趙裁縫もまた呉麻子ともども革命の機運を高める要素となっているのである。

呉麻子の職業だけは父親や趙裁縫と異なり、意味を持っている訳ではない。しかし花園山に出入りする人のなかに呉の知り合いがいたことで、民たちが花園山に出入りし、革命派たちの集会に興味を持たせるきっかけや近代教育への興味をかきたてるという点で、呉にも一定の役割が与えられている。

ここで、タイトルにもなった「民的 1911」の「民」とはどのような意味があるのかを考えてみたい。「民」は主人公の名前でもある。主人公「ぼく」の生まれた日は、父親が戊戌の政変が失敗に終わり、首謀者たちが菜市口で斬首されたことを知った日であった。父親は変法派の失敗に涙し、息子が生まれたことを知ると“又来一個受累的小民「また苦しい思いをさせられる細民が生まれた」”(p.4)と感じ、「民」と命名したのである。

このように「民」は主人公の名前ではあるのだが、社会の下層に暮らす庶民を指している。そのことが如実に表わされるのが、ラストシーンである。物語のエピローグでは武昌城で行われた建国のための“祭天「天を祭る」”が行われる。武昌閱馬場に祭壇が設けられ、黎元洪が祭りを取り行った。歓呼の渦のなか、父親

とともに参加していた「ぼく」は以下のように革命家たちに問いかけるのだった。

ぼくはこらえきれずに鄧玉麟に「鄧兄ちゃん、今から、ぼくたちはみんなほんとうに中華民國の人間になるの？」と尋ねた。鄧玉麟は「もちろんだよ」と答えた。父が「でもどうして民国なんだね？」と口にすると、隣にいた蔣翊武が「この国が人民のものになるからだよ」と答えた。ぼくは「ほんとうに人民のものになるの？」と言うと、熊秉坤が「今はたぶんまだ完全な答えはないけれど、それが我々の戦っている目標なんだよ」と話した。(p.38)

そしてその目的を達するために、みなが口々に“民，你要努力奮闘！〔民、きみは努めて戦うんだよ！〕”と言われ、民はこの言葉をずっと胸に、そして 100 年経ってもこの言葉を伝えて行かねばと考えるのである。つまりここでの「民」は個人名ではなく、やはり人民を指し、庶民全般を表しているのである。そして 100 年ということが意識されているように、まさに辛亥革命 100 年を記念した作品となっているのである。

しかし庶民にとっての武昌蜂起（辛亥革命）は、ほんとうに民が感じたような「変化」と直結した輝かしいものだったのだろうか。それは民が纏足をして逃げることもできず自宅で待っている母に革命の勝利を告げる場面こそが、多くの庶民にとっての革命の真実を表しているのではないだろうか。

（略）ぼくと父が今晚の蜂起に参加していたことを、ぼくは母に知らせたかった。ぼくたちは勝利者なのだと。

母はなんと勝利の意味も分からなかった。ぼくは「勝利した

からには、これからぼくたち漢人の天下になるんだ」と言った。母は「それじゃあ漢人の天下になったら、お前の父さんをいじめる人がいなくなるのかい？」と言うので、ぼくは「それは…」と言うと、母はまた「漢人が散髪に来たら、多めにお金をくれるとでもいうのかい？」と言った。ぼくはまた「それは…」と言うと、母は「そうだ、米を買うのにもまだお金がいるのかい？」と言った。ぼくはほんとうに一言も言うことができなかった。母は「それだけのことよ。勝利と言ったって、漢人が天下をとっても、あんたはあんた、わたしはわたし、父さんは散髪屋にすぎないのよ。散髪に来た人が多くお金を出すわけでもなく、わたしたちがお米を買うお金だって相変わらず足りないのよ」と言うのだった。母がまくしたてるので、ぼくはどうしようもなかった。ぼくは男どもが女は髪は長いが見識がせまいと好んで言うのも無理はないと思ったのだった。(p.31)

民の目には男はロマンチスト、女はリアリストと映ったわけだが、一方で民の母親は「革命」や世界の動向など気にかかる余裕のない庶民の姿そのものと言える。お上が変わったとしても、自分たちの暮らし向きには何ら変わりはないという現実を民に指し示すのだ。民にも母親の言に反論する余地はなく、一方では母の言うことも認めざるを得なかったのである。

「民的 1911」は辛亥革命 100 周年を記念する作品のため、人々の手によって国づくりができるという希望を示すラストシーンを見ると、ある種のプロパガンダ色を感じる。しかし方方は単純なラストシーンとは別に、民の母親の示す庶民の現実的な感覚を描くことで、真の意味での「(庶)民」の 1911 年を描いた。そして民の母親が革命を感じられるとしたら、それには辛亥革命以降の長い歳月がどのように社会を変革していくのかということに

かかっているのだということをも示しているのだ。そのためには民たちのような庶民の努力も必要であると強調し、「民国」という庶民の創る国の未来は「(人) 民」次第だというのである。

辛亥革命から 100 年、革命家たちの夢見た社会に現実の中国はなったのだろうか。あるいはまだ「理想」は実現されていないのか。それは作品では示されず、読者の判断にゆだねられているのであるのではあるが、民が 100 年伝えていかねばと感じたメッセージからは、辛亥革命後 100 年経ってもなお中国はまだ革命の途上にあると、方方は感じているのではないだろうか。

4. おわりに

方方「民的 1911」は辛亥革命 100 周年前夜に描かれた、辛亥革命 100 周年を記念した作品である。一見すると、辛亥革命に始まる「(人) 民」の国家建設へのオマージュとも取れる作品となっているが、グレイ・ユーモアとも称される方方らしい作品とも言える。それは武昌蜂起の過程を描くことで、主人公民ひいては庶民にとっての武昌蜂起（辛亥革命）を描いているのだが、民たちにとっては革命は具体的な形はなくとも輝かしい未来を象徴している一方で、民の母親に代表されるように、政府が変わったとしても暮らしが変わるわけではないと否定的な捉え方をも描いていることである。多くの「(人) 民」にとっての辛亥革命は、革命派の人々や民たちのように意味のあるものではなく、日常を変革してくれるものですらなかった。もちろん方方もその後の 100 年間「(人) 民」が努力することで、社会のありようが変わるのだという希望を示しているのではあるが、一方では上に立つ人や政府が変わることが、すなわち人々の暮らしをよくすることでもないということを示している。

このように「民的 1911」の指し示す「民」とは、もちろん主

人公民のことであり、同時に「(人)民」そのものでもあった。民にとっての1911年は国家が「中華民国」となり、人民が主役となれる社会の到来を意味した。それは具体的な形をともなっていないかったけれども、それを形にしてゆくのもまた自分たち「(人)民」なのであった。しかし一方では、お上が変わろうとも生活は変わらないという「(人)民」の現実もあった。1911年は辛亥革命が起こったかもしれないが、このときどれほどの庶民が社会の変化を実感したのであろうか。方方は社会の最下層で暮らす人々を多く描いてきたこともあり、100年近くたっても社会の下層部に暮らす人々の変わらぬ現実も知っていた。そういう意味でも、方方は単なる辛亥革命100周年を祝うだけの作品を描くことはしなかったのであろう。

方方はこのところ『漢口的滄桑往事』などの出版のために調べた歴史的な背景や地理を作品に生かしていることが多い。武漢の歴史や建築物を調べたことがきっかけで、「春天来到曇華林」(『小説月報・原創版』2006年第2期)では武昌の曇華林を舞台にした作品を描くことになったことは方方自身も語っている⁽³⁾。近作では「刀鋒上的螞蟻」(『中国作家』2010年第5期)は廬山の別荘地を描いているが、これは『到廬山看別墅』(湖北美術出版社、2001)で廬山の別荘のことを調べたこととは無縁ではない。

「民的1911」でも、これまでの武漢の歴史に関する調査をもとに作品を組み立てているが、方方は武昌蜂起の過程を踏まえつつも、作品としての面白みを増すために史実とは異なる改編も行っている。主人公の民や大道床屋を営む父親たちが武昌蜂起に参加することもそうであるが、宝善里における孫武の爆薬の事故などでも細かな改編を行っており、読者を引き込ませるように武昌蜂起にいたる過程を巧妙に描いている。

「民的1911」で描かれた武昌蜂起は、武昌蜂起に到るまでの

平たんではない道のり、さらには二転三転する状況を展開することで、物語性の富んだ作品となっている。革命の犠牲者について描く一方で、民の父親の言動で「笑い」の要素を取り入れ、緊張と緩和をうまくミックスし悲壮感のない作品として仕上げている。この点では方方「出門尋死」(『人民文学』2004年第12期)を彷彿とさせ、方方作品特有の「死」の影があまり感じられない作品となっている。もちろん「民的 1911」を単なる辛亥革命 100 周年を記念する作品に終始し、辛亥革命の賛歌としているわけではないが、全体的には方方らしいシニカルな視点に乏しく、単純な作品になっているとも言える。これが一つの歴史的勝利を記念する作品を描くことの難しさなのかもしれない。

〈注釈〉

(1) 方方は引用の頁数を示していない。

(2) pp.165,166、() 内引用者。

『辛亥武昌首義史』は注釈として、宝善里の事故が 10 月 8 日から 9 日の 2 つの説があることを述べたうえ、9 日の午後 1 時から 4 時の間に起こったことと推察している。また引用部は劉同の談話の記録や蔡寄鷗『鄂州血史』(龍門聯合書局、1958)を参照したことが付されているが、ここでは『辛亥武昌首義史』の記述のみに止める。

(3) 『春天来到曇華林』(作家出版社、2007)の「後記」で『漢口的滄桑往事』を出版するにあたり、武漢の老建築物を調査したこと、同級生の夏武全たちと曇華林を歩き回ったことが述べられている。何度か曇華林を訪れるなか、早春のある日「春天来到曇華林」という言葉が浮かんだことで、「春天来到曇華林」を創作することになったと、方方は説明している。